

## ドゥンス・スコトゥスの個体性理解について

本間 裕之

### 1. はじめに

ドゥンス・スコトゥスの形而上学において、個体化の原理は「個別的存在性」(entitas individualis)などの術語で表されているということについては彼のテキストから明らか<sup>1</sup>であるし、すべての研究者もこのことに同意すると言ってよい。だがこのことだけではスコトゥスにおける個体化の原理についての私たちの理解は全く深まらない。

謎の多いスコトゥスの個体化の原理についての理解を深めようとしてきた研究者たちが採った道は大きく二つに分けられるだろう。一つには「個別的存在性」のような概念を、スコトゥスが用いている他の概念によって直接分析しようとするものである<sup>2</sup>。もう一つには、スコトゥスにとっての個体化、ないしは個体の問題の内実を捉えようとする道である<sup>3</sup>。これは第一の道のための準備段階としても理解することができる。本稿はこの第二の道を採用して探求するが、とりわけここで問題とされるのは、スコトゥスにおいて「個体性」とは何か、つまりスコトゥスにとって「個別者」の最も基礎的な特徴は何であるのか、ということである。この道を探るものは、このことを明らかにすることで、個体化の原理が果たすべき役割が解明され、その特徴付けが可能になると考える。というのも、彼らは、個体性理解が異なれば、探求されるべき個体化の原理も異なり得るのであって、それゆえスコトゥスにとっての個体性とは何であるのかということを確認することは、スコトゥスの個体化の原理を分析する上で有益なことであると考えているからである<sup>4</sup>。

この第二の道に沿って展開された先行研究をここで簡潔に紹介しておこう。まず Park は「類似した二つのもの間にある差異」と説明される「区別」と、「個別者が何らかの部分にとっての全体であるということとはあり得ない」と説明される「不可分割性」とのいずれがより根源的であるか、という問いを立て、後者の不可分割性こそがスコトゥスにとって最も重要な個体性であると語り、スコトゥスの個体化の問題が第一義的には不可分割性の問題であったと結論付けている<sup>5</sup>。Noone も Park とは大きく変わらない見解を採り、例えば「人間」という種

的特質はソクラテスやプラトンのような諸々の個別者によって例化されるが、ソクラテスやプラトンそのものが何かによって例化されることはない、というように、各々の個別者は種を例化するものであるが、個別者にはそれを例化するものがないとして、個性性とは「例化不可能性」であると考えた<sup>6</sup>。他方で Gracia は、彼らとは異なる見解を採用し、各々の個別者がすべて数において一であるということから「数的一性」が個性性であると考え、それが個別的な存在者の属性であると解釈した<sup>7</sup>。

Gracia が考えるように、数的一性は確かに個別的な存在者が有する形而上学的な特徴の一端を言い当てている。しかし本稿は彼の議論に与しない<sup>8</sup>。だからといって Park や Noone に全面的に賛成するわけではない。彼らの提示している個性性よりも、より明確でより情報量の多い個性性をスコトゥスのテキストから抽出することができると考えられ、その点で彼らの見解は不十分であると言えるからである。

この目的のために、本稿では、スコトゥスが個性化の原理について検討している『オルディナティオ』第二卷第三区分第一部第二問のテキストのうち、ガンのヘンリクスに帰せられる「二重の否定」説へのスコトゥスの応答を検討しよう。まず第二節では、「二重の否定」説に関して簡単に説明した後、スコトゥスがどのようにこの説を批判したか、ということを見て取る。そして第三節では、第二節で得られた二重の否定説に対する批判をもとに、スコトゥスによる個性性理解を構築しよう。

## 2. 「二重の否定」説とそれへの反論

『オルディナティオ』第二卷第三区分第一部第一問において、「質料の実体は自らによって、あるいは自らの本性によって個別者ないし単一者であるか<sup>9</sup>」という問いに対して否定的なしかたで解答することによって、スコトゥスは質料の実体、さらには非質料の実体である天使を含む任意の被造物の個性化の原理についての探求を開始する。続く第二問では「質料の実体は、措定的で内在的なあるものによってそれ自身で個別者であるか<sup>10</sup>」という問いが提出される。そこでスコトゥスは、ガンのヘンリクスに帰せられる、個性化の原理の「二重の否定」説を議論の俎上に乗せる<sup>11</sup>。「二重の否定」とは、「それ自身における」(in se)否定と「他のものに対する」(ad aliud)否定<sup>12</sup>との二つの否定のことを指す。それぞれの否定を詳しく説明すれば、「それ以上(下属する部分(pars subjectiva))

へと)分割されない」ということと、「これはあれではない」ということである。下属する部分への分割とは、その諸部分が分割される場所のものであるところの部分への分割であり、この分割は普遍的な全体に固有な分割である<sup>13</sup>。つまり、その諸部分に全体を述語付けることを可能にするような分割である。例えば、動物は人間、猫、フクロウ等々に分割され、それらの各々はまた動物である。また、人間はソクラテス、プラトン、カリアス等々に分割され、それらの各々はまた人間である。このようなしかたで、類を種へと、種を個別者へと分割するようなものであって、「石を二つに割る」とか「スイカを六つに切る」などのような分割とは異なる性質を有するものである。このことを踏まえれば、二重の否定に基づくこの見解は、「ソクラテスがソクラテスである限りで、それ以上は分割されず、しかもソクラテスである限りではプラトンではない」という例によって説明できるように、ソクラテスがソクラテスであるのは、この二つの否定によってである、とするものである。以上のことから、「二重の否定」説を次のように定式化することができる。

**個体化の原理についての「二重の否定」説** 個体化の原理は、あるものが「それ以上分割されない」ということと、そのあるものが「他のものではない」という二つの否定である。

さて、スコトゥスは、この「二重の否定」説への批判を始める前に、個体化の原理の探求において何が問われねばならないのか、ということを確認する。彼は次のように問題を整理している。

[問い求められているのは]むしろ、近接的で内在的な基礎としての何によって、そのあるものに、この[下属する部分へと分割されることへの]相反することが内在するのか、ということである。それゆえ、この主題についての諸々の問いの意味は次のことにある。すなわち、この石の内にある何が、「近接的な基礎として」のそれによって、そのいかなるものもそれ自身であるところの多くのものへと分割されることが、それに相反するところのものであるのか、ということである。その分割とは、普遍的全体に固有な、それに下属する諸部分への分割のようなものである<sup>14</sup>。

この整理に基づけば、『オルディナティオ』における個体化の原理の探求において問われているのは、「それによって、分割されることがあるものに相反するところのもの」とは何か、ということである。この引用からは、「二重の否定」説に関して検討されるべき問題点を、少なくとも三つ取り出すことができる。それは以下の通りである。

1. 「二重の否定」は内在的な基礎であるか。
2. 「二重の否定」は下属する部分へと分割されることへの相反を引き起こすのに十分であるか。
3. 「二重の否定」は近接的な基礎であるか。

「内在的な基礎」とは、個体化されている事物において見出される原因のことであり、附帯性のように外から到来する、と言われるものとは対照にあるものである。「下属する部分へと分割されることへの相反を引き起こす」ということに関しては続く第二節第一項で見ることにするが、簡潔に言うと、「 $X$ はソクラテスである」という命題の  $X$  に入るのは、ソクラテス以外にはあり得ない、ということである。また、「近接的な基礎」とは、その当のものが、ある結果にとっての直接の原因となっているもののことである。

さて、問題点 1 に関しても難点が含まれると思われる<sup>15</sup>が、スコトゥスがここでおもに取り上げているのは問題点 2 と問題点 3 とである。それゆえ本稿でもこの二つの問題点に焦点をあわせ、彼の批判を分析することにしよう。

彼はここで、大きく分けて三通りのしかたで批判を行っている<sup>16</sup>。まずひとつは分割に関する否定に対してであり、もう一つは否定そのものに対してであり、最後の一つはヘンリクスの見解そのものに対してである。スコトゥス自身の問題提起と関係しているのは、とりわけ第一の批判と第三の批判とであり、ここではこの二つの批判を一つずつ検討することにする<sup>17</sup>。

## 2.1 第一の批判

スコトゥスがはじめに提示する批判は、「ある存在者には、それにおける単なる欠如によっては何ものも端的に相反することはなく、むしろそれにおける何らかの措定的なものによって相反するのである<sup>18</sup>」というものである。これは問題点 2 からの批判であろう。スコトゥスはこのことを以下のように証明している。

しかしながら、[否定は] その存在者の、何らかのものに対する形相的な相反を措定しない。というのも、可能であれ不可能であれ、それらの否定が取り除かれるならば、(そこに否定はないのだから) そのような存在者は、その諸々の否定の反対とも両立し、それゆえ、それに自体的に相反すると語られるところのものとも両立することになるが、これは不可能だからである<sup>19</sup>。

これに関してスコトゥスは「視力を持たない人」の例を挙げている。いま視力を持たない人は、否定によって「視ること」という働きへの可能性が取り去られてはいるが、手術など、何らかのしかたでその人が視力を得ることは可能であり、そのようにして視力を得たならば、もはやその人にとって「視ること」の可能性は取り去られていないことになる。つまり、視力を持たない人は何らかのしかたで「視ること」を獲得し得るのである。さて、仮に、ある人が視力を持たないということと同様のしかたで、個別者が「分割されない」という否定によって、下屬する部分への分割への可能性が取り去られているのみであるとすると、その否定が取り去られることで、下屬する部分への分割と個別者とが両立し得ることになってしまう。この帰結は受け入れられない。このようにスコトゥスは、「分割の否定」と「分割への相反」とを明確に区別した上で、個別者には、「分割されない」という否定よりも強力な条件である「分割に相反する」が当てはまるべきだと考え、そうした相反を引き起こすのはヘンリクスと言う否定ではなく、何らかの措定的なものである、と結論付ける<sup>20</sup>。したがって、第一の批判からは、「二重の否定」の内、「分割の否定」は、個別者を規定するのに不十分であり、「分割への相反」というより強い条件のもとで理解されねばならず、それゆえ「二重の否定」説は問題点2に抵触する」ということが得られる。

## 2.2 第三の批判

第三の批判はヘンリクスの見解そのものへと向けられる。スコトゥスはヘンリクスの「二重の否定」説に対して、「しかしながらこの立場は全く余分であり、問いに答えていないと思われる。というのもこの[ヘンリクスの]立場が措定されても、依然として同じ問いが残るからである<sup>21</sup>」と語る。この批判は、問題点3からの批判であると言える。すなわち、ヘンリクスの立場は近接的な基礎を十分に提示できていない、ということである。彼はこのことを、続く箇所では例を交えつつ説明している。

すなわち、[ヘンリクスが] 措定する「二重の否定」に関して、それによってその否定が個別者に適合するところの根拠が何であるかを私は探求する。もしこの二重の否定が自体的原因である、と彼が言うならば、問いに対して答えられてはいない。というのも、それによってその二つの否定の反対が[個別者に] 相反するところのもの、結果として、それによってそれらの否定が[個別者に] 内在するところのものが問われているからである。

同様に、これとあれとにおいて否定は同じ性質であるのに、どんな理由で「否定」がこれであるのかを探求しよう。すなわち、ソクラテスにおいて「二重の否定」があるように、プラトンにおいても二つの観点の否定がある。それゆえ、どんな理由でソクラテスが（固有で規定された）この単一性によって「単一なもの」であり、プラトンの単一性によってそうではないのか。これは、どんな理由で「否定」がこの否定であるのか、ということが見出されなければ語られ得ず、このことは何らかの措定的なものによってでなければあり得ない<sup>22</sup>。

ここでスコトゥスは、「自体的原因」という観点を導入することによって、まさに「ある個別者の否定」になるための原因の探求が行われていない、という点から、ヘンリクスの「二重の否定」による个体化の議論は不十分であることを指摘する。つまり「ソクラテスにおける「二重の否定」」や「プラトンにおける「二重の否定」」を析出させる原因が問い求められねばならないのである。それゆえ、「二重の否定」は、スコトゥスにとって个体化の近接的な原因を与えるものではない。むしろ、いわば个体化の結果であり、個別者に関する一つの説明規定であると言える。その意味で、スコトゥスにとって「二重の否定」とは、个体化の原理ではなく、個別者の個性性であると考えられるのである。したがって、第三の批判からは、「「二重の否定」は、个体化の原理、すなわち个体化の近接的な原因というよりもむしろ個性性として理解され、それゆえ「二重の否定」説は問題点3に抵触する」ということが得られる。

以上、スコトゥスが整理した問いから抽出した三つの問題点をもとに、「二重の否定」が个体化の原理として適格であるかどうかを、スコトゥスのテキストに沿って検討したことになる。これら二つの批判によって得られたのは、「「分割の否定」は、個別者を規定するのに不十分であり、「分割への相反」というより強い条件のもとで理解されねばならず」、また「「二重の否定」は、个体化の原理というよりもむしろ個性性である」ということであった。ここで注意すべき二

つの点がある。一つは、「個性のあり方としては、「二重の否定」の考えかたそのものが棄てられているわけではない」ということであり、いま一つは「他のものに対する否定、すなわち他との同一性の否定に関しての批判はなされていない<sup>23</sup>」ということである。この二点に留意しながら、スコトゥスの「二重の否定」に関する理解を整理しよう。

### 3. 「二重の否定」に基づく個性

仮にスコトゥスの以上の批判を受けたとすれば、ヘンリクスは自らの「二重の否定」説を以下のように修正することも可能であったらう。

**修正された「二重の否定」説** あるものが「それ以上分割されることに相反する」ということと、そのあるものが「他のものではない」という、二つの否定的なことがらは個性を示す。

「それ以上分割されない」という「二重の否定」の一方の否定が、そもそも「分割される」ということが不可能である、というより強力な条件に置き換えられ、「分割されることが不可能である」という一つの否定的なことがらと、「他のものではない」という一つの否定によって、「二重の否定」説が新たに定式化されることになる。この修正された「二重の否定」説に対して、もはやスコトゥスは批判を加えることはないだろう、ということはいままでの検討を踏まえれば明らかであると言える。スコトゥスにとって、個性化の原理が措定的なものであり、それゆえ個別者自身も何らかの措定的な性質のもとで語られるものであるとしても、それが個別者である限りで、修正された「二重の否定」説が妥当するようなものであろうからである。というのも、彼にとっての個別者は、彼自身が語るように「分割されることに相反する」ものであったし、彼が想定している個性化の原理においても、相異なる二つのものが相互に区別される契機が含まれているからである<sup>24</sup>。さらに彼は、別の著作においては個別者とはどのようなものを説明する際に、この修正された「二重の否定」説を採用している<sup>25</sup>。これらのことから分かる通り、スコトゥスにとって、個性化の原理についての学説としては棄てられるべき「二重の否定」説も、個性性についての学説としては、修正された「二重の否定」説というかたちで受け入れられるのである。

さて、以上の考察からスコトゥスは、修正された「二重の否定」説を個別者の説明規定として受け入れていることが明らかになった。ひとまず、彼の理解する個別者とは、「下属する部分へと分割されることに相反し、他のすべての個別者から区別される、という性質の基体となるものである」と分析することができる。さらには、「そのような「二重の否定」によって説明される性質が個別者にのみ内在する」と主張することも可能であろう。実際、彼は以下のように述べている。

この石に内在する、固有な根拠としての措定的なあるものによって、下属する部分へと分割されることがそれに相反する、ということは必然である。そして、その措定的なものは自体的に、個体化の原因であると言われるところのものであろう。というのも、個体化ということによって、私は、その分割不可能性、ないし分割可能性への相反を理解しているからである<sup>26</sup>。

ここで語られるように、「個体化の原因」と呼ばれる固有な根拠によって、個別者に「下属する部分へと分割されることに相反する」ということが内在するのである。修正された「二重の否定」説の内でも「分割への相反」に関しては、「個体化」ということによって「分割への相反」を理解している、というスコトゥスのことばからも、個別者に固有で本質的な性質であるということは確認できるであろう。

#### 4. おわりに

以上で、ガンのヘンリクススの個体化論に対する応答を検討することで、スコトゥスがヘンリクススの二重の否定説を、個体化の原理に関する学説としては拒否するとしても、個性性についての学説としては受け入れるということが見て取られた。こうして得られた個性性は「あるものが「それ以上分割されることに相反する」ということと、そのあるものが「他のものではない」という、二つの否定的なことからは個性性を示す」というように記述されるのであった。こうして抽出されたスコトゥスの個性性理解を改めて整理すると、「不可分割性」と「他のものとの区別」という二点が盛り込まれている。Park や Noone によって提示された個性性よりも豊かなものが得られていることが分かるだろう。Park が根源的ではないとした「区別」の項も、スコトゥスの受け入れる二重の否定説に基づく個性性理解に盛り込まれているのであって、少なくとも重要性を欠いた項目であると

は思われない。それゆえ、彼らの提示する「不可分割性」や「例化不可能性」という個性性理解は、本稿で得られた個性性理解と比較すれば不完全なものであると言えるだろう。

また、はじめにで Gracia の見解についての説明とともに少し触れ、別稿<sup>27</sup>にて考察したことであるが、スコトゥスのこうした個性性理解は必ずしも存在論的・形而上学的な特質ではない。つまり、個性性として理解された「二重の否定」は必ずしも魂の外の世界の事物にのみ適合する性質であるというわけではない。むしろ、魂の内なる世界の事物、つまり認識論的ないしは論理的な領域に含まれる事物にも適合する側面を含んでいる。というのも、ヘンリクスに対するスコトゥスの返答において持ち出された「下屬する部分への分割」とは、まずもってポルフュリウスの木のような、類や種に属する第一志向の諸概念によって形成される範疇の体系において、類が種へ、種が個別者へと分割されるようなものが考えられていたからである。こうしたことは、以下のテキストから読み取ることができるだろう。

範疇の体系に自体的に属するところのものはみな、その体系には決して属することのないものすべてが除かれつつ、その範疇の体系の内にある。

[……] それゆえ、本質の特質のもとで劃然と類を考察することで、類における最高のものが見出されるように、中間の類、種、種差が見出される。さらに、そこでは最下位のもの、すなわち単一なものが、現実的な現実存在が全きしかたで除かれつつ見出される。このことは明証的に明らかである。というのも、「この人間」は、「人間」と同様、現実的な現実存在を形相的に含んでいることはないからである<sup>28</sup>。

こうした理解を踏まえると、スコトゥスにとって「類が下屬する部分へと分割される」というのは、「類概念が、その主語となる種概念へと分割される」ということであり、「種が下屬する (subjectus) 部分へと分割される」というのは、「種概念が、その主語 (subjectum) となる個別者概念へと分割される」ということである<sup>29</sup>。よって、「個別者は下屬する部分へと分割されることに相反する」という個性性の規定は、「個別者概念は決して述語にはならず、ただ主語にしかならない」ということの言い換えであることが分かる。このように、スコトゥスの個性化理論から取り出される個性性には認識論的・論理的な側面が色濃く刻み込まれている。

このように、スコトゥスの個性化論における議論から取り出された個性が存在論的・形而上学的な側面と認識論的・論理的側面の両方を有するのは、彼の個性化論が共通本性を軸として考察されているということが大いに関係しているだろう。魂の内にも外にも存在し得る共通本性、特に種の本性が魂の外において、個性化の原理である個別的存在性によって特定化されることによって個別者がある一方で、その同じ本性が魂の内に存在し、個別差異によって特定化されることで個別者の概念がある<sup>30</sup>。こうして共通本性が要となって、個別者（および個性）は存在論的・形而上学的領域と認識論的・論理的領域の二つの領域で考察されることになる。

個性性を存在論的・形而上学的領域と認識論的・論理的領域の両方で扱うことが可能であることが、個性化の問題を考察する上でスコトゥスにとって必要であったとさえ言えるだろう。というのも、個性化の原理を説明する際にスコトゥスが持ち出す形相的区別は、まさに形而上学的領域と認識論的・論理的領域の二つの観点から考察されるべき概念であり<sup>31</sup>、これら二つの領域を区別して考察することによってはじめて理解可能になるものだからである。

---

<sup>1</sup> スコトゥスの主著である『オルディナティオ』第二巻第三区分に限っても、そのことが読み取れる記述は枚挙に暇がないほどである。例えば *Ord. II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 180* には「〔個別者の事象性は〕可能的で可能態的なものとしての種の事象性を規定する現実態のようなものである」(“*[ista realitas individui] est quasi actus, determinans illam realitatem speciei quasi possibilem et potentialem*”)と語られている。ただし、スコトゥスは多様な術語を用いて個性化の原理を指定していることには注意が必要である。紙幅の都合上詳細に述べることはできないが、『形而上学問題集』と『オルディナティオ』とにおいてそれぞれ別の術語が用いられているし、『形而上学問題集』に限っても多様な術語が用いられている。この問題については Shibuya [2008] や横田 [2004] が詳しい。

<sup>2</sup> 主に Gilson [1952] や Bettoni [1961] などがこの派閥に属すると言える。彼らは実在 (*exsistentia*) という概念からスコトゥスの個性化の原理を理解しようとしていた。また近年では King [1992] が「度」 (*gradus*) という観点から個性化の原理を分析しようと試みた。

<sup>3</sup> 本稿では取り上げないが、こうした道を採用のもので特に重要なのは Wolter による一連の研究である。彼は Wolter [1990] や Wolter [1994] において、個性化の問題を形而上学的な観点からのみではなく、認識論的な側面からの理解も劣らず重要であることを主張している。個性化の原理が形相的区別の文脈で語られることを考えると、このことは正しいだろう。形相的区別については本間 [2019] を参照。

<sup>4</sup> Park [1988], pp. 109–10; Gracia [1994], p. 13.

<sup>5</sup> Park [1988].

<sup>6</sup> Noone [1995].

<sup>7</sup> Gracia [1994].

<sup>8</sup> Gracia の議論は形而上学的な側面にのみ重きを置き、Wolter の指摘するような認識論的（あるいは論理的）な側面に無関心だからである。別稿で証明したとおり、スコトゥスにとっての

個体の問題は明らかに認識論的・論理的領域にまで及んでおり、Graciaの提示する個性性では不十分となるからである。詳細は本間[2017]を参照せよ。

<sup>9</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 1, n. 1 (Vat. VII, pp. 391–2).

<sup>10</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 43 (Vat. VII, p. 410).

<sup>11</sup> ただし、Pickavèは、個体化の原理についてのヘンリクスへの態度は不明確である、と指摘している。Pickavèによれば、ヘンリクスはある著作において「存続(subsistence)、すなわちそれらの現実存在(existence)によって諸事物は個体化される」というが、ヘンリクスはまた「神が個体化の原理である」とも語っており、また別の著作では「個体化の原理は否定によって、より精確には、「二重の否定」によって生じる」とも語っている。Cf. Pickavè [2005], pp. 38–49. 引用はp. 39より。

<sup>12</sup> 「それ自身における」と「他のものに対する」という否定についての説明は、ヴァティカン版底本に附された二重の否定に関する註を参考にした。Cf. *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 44 et note 1 (Vat. VII, p. 411): "[singularitas vel individuatio non dicat nisi duplicem negationem] scil. non-divisionem (seu privationem divisionis) in se, et non-identitatem (seu privationem identitatis) ad aliud". □は筆者による補足。

<sup>13</sup> Cf. Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 48 (Vat. VII, pp. 412–413).

<sup>14</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 48 (Vat. VII, pp. 48–49): "... sed, quo ut fundamento proximo et intrinseco ista repugnantia insit isti. Est ergo intellectus quaestionum de hac materia, quid sit in hoc lapide, per quod 'sicut per fundamentum proximum' simpliciter repugnat ei dividi in plura quorum quodlibet sit ipsum, qualis 'divisio' est propria toti universali in suas partes subiectivas".

<sup>15</sup> 「二重の否定」の内、「他のものに対する否定」は、他のものに対しての関係であり、したがって外在的なものである、という見解もあり得る。スコトゥスがこのことに関してどのように考えていたかは定かではないが、ここで彼がこの問題点に沿って「二重の否定」説を検討しないのは、後に述べられるように、スコトゥスが明示的に「他のものに対する否定」を批判しないということが関係していると思われる。したがってここでは問題点1に付随する難点には立ち入らないこととする。

<sup>16</sup> すなわち、nn. 49–52, 53–54, 55–56である。

<sup>17</sup> 第二の批判は、「否定」が個体化を考察する上で、そもそも適格ではない、というものである。そこではそれぞれ「第一実体は第二実体よりも完全であるが、否定によってはそのようなことは生じ得ない」ということと「否定によって語られることがら全体は自体的な一ではないので、否定によって受け取られた存在性が単一であるところのものに述語されることはない」というものである。先の問題点2と第二の批判の内、「完全性」という側面に注目して、スコトゥスの個体化の原理の特徴を描く研究もある。小川量子「ドゥンス・スコトゥスにおける個体化の原理の完全性について」、『中世思想研究』第28号、中世哲学会編、1986年所収、pp. 129–137参照。

<sup>18</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 49 (Vat. VII, p. 413): "... nihil simpliciter repugnat alicui enti per solam privationem in eo, sed per aliquid positivum in eo".

<sup>19</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 50 (Vat. VII, pp. 413–414): "... non tamen ponit formalem repugnantiam illius entis ad aliquid, quia per possibile vel impossibile circumscriptis illis negationibus (cum non sint) staret tale ens cum opposito illarum negationum, et ita cum illo cui dicitur repugnare per se, quod est impossibile".

<sup>20</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 52 (Vat. VII, p. 415).

<sup>21</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, n. 55 (Vat. VII, p. 416): "... tamen videtur omnino superflua et non respondere ad quaestionem, quia ipsa posita, adhuc remanet eadem quaestio".

<sup>22</sup> Duns Scotus, *Ord. II*, d. 3, p. 1, q. 2, nn. 55–56 (Vat. VII, p. 416): "[55] Nam de duplici negatione, quam ponit, quaero quae est ratio quare negatio ista convenit illi? Si istam duplicem negationem dicit esse per se causam, non respondetur ad quaestionem: quaeritur enim illud per quod repugnant opposita istarum negationum, et per consequens per quae insunt istae negationes. [56] Similiter, quaero unde 'negatio' sit haec, cum sit eiusdem rationis in isto et in illo? Nam sicut in Socrate est duplex negatio, ita in Platone est negatio duplicis rationis; unde igitur Socrates est 'singulare' hac singularitate (propria et determinata) et non singularitate Platonis? Non potest dici, nisi inveniatur unde 'negatio' sit haec negatio, et hoc non potest esse nisi per aliquid positivum". ただし、ここで囲んだ箇所に関して、写本Y, Qの支持する"quod"を読む。

<sup>23</sup> 『形而上学問題集』においても「他のものに対する否定」への反論は行われていない。『形而上学問題集』におけるスコトゥスによる「二重の否定」説批判は *Quaest. Metaph. VII, q. 13, n. 119* (Oph. IV, pp. 258–259) を参照。

<sup>24</sup> Cf. Duns Scotus, *Ord. II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 170* (Vat. VII, p. 475): 「それゆえ、これとあれとにおける本性のほかに、何らかの第一に相異するところのものがある。それらによってこれとあれ（この個別者におけるこれとあの個別者におけるあれ）とが異なっているのである」 ("Ergo praeter naturam in hoc et in illo, sunt aliqua primo diversa, quibus hoc et illud differunt (hoc in isto et illud in illo)").

<sup>25</sup> Duns Scotus, *Quaest. Metaph. VII, q. 13, n. 115* (Oph. IV, p. 257): 「以下のことは知られるべきである。個別者、ないし数において一なるものは、多くのものへと分割可能ではなく、また数に基づいて他のすべてのものから区別されるところのものと言われる」 ("Notandum quod individuum, sive unum numero, dicitur illud quod non est divisibile in multa, et distinguitur ab omni alio secundum numerum"). なお、続く n. 116 において、「多くのものへと分割可能ではない」ということに関して「それ以下属する部分への分割が相反する」と註している。

<sup>26</sup> Duns Scotus, *Ord. II, d. 3, p. 1, q. 2, n. 57* (Vat. VII, p. 417): "... necesse est per aliquid positivum intrinsecum huic lapidi, tamquam per rationem propriam, repugnare sibi dividi in partes subiectivas; et illud positivum erit illud quod dicitur esse per se causa individuationis, quia per individuationem intelligo illam indivisibilitatem sive repugnantiam ad divisibilitatem". なお、Gracia [1996], p. 233 や石田 [2016], p. 155 が明らかにしているとおり、「individuo」ということばには多義性があり、通常の「個体化」の意味に加え、個別者の有する「個性性」という意味がある。ここでは「individuo」が「個性性」という意味であるか「個体化」という意味であるかの判別が難しい箇所である。諸訳は軒並み「個体化」系統のことばで翻訳している。だが、この箇所を「個性性」と訳す必然性がないのと同様に、「個体化」と訳さねばならない必然性もないと思われる。そのいずれであるのかは決定できない。ただし、このテキスト、および本稿での議論が示しているとおり、スコトゥスにとって、個体化の原理／原因は、同時に「二重の否定」という個性性を引き起こすものでなければならないことは指摘されねばならない。ただし、スコトゥスがここで用いている「個性性」(individuo) の内実と、本稿が目的としていた、スコトゥスの個体化論を分析することによって取り出すことのできる「個性性」の内実とが必ずしも同じ水準で語られ得るものであるとは限らないため、ここでは紛れがないように「individuo」の翻訳を「個体化」で統一した。

<sup>27</sup> 本間 [2017].

<sup>28</sup> Duns Scotus, *Ord. II, d. 3, p. 1, q. 3, n. 63* (Vat. VII, pp. 419–420): "... in coordinatione praedicamentali sunt omnia quae per se pertinent ad illam coordinationem, circumscripto quocumque quod nihil est illius coordinationis, ... Igitur sicut invenitur supremum in genere praecise considerando illud sub ratione essentiae, ita inveniuntur genera intermedia, et species et differentiae; invenitur etiam ibi infimum, scilicet singulare, omnino circumscripta existentia actuali, — quod patet evidenter, quia 'hic homo' non plus includit formaliter existentiam actualem quam 'homo'".

<sup>29</sup> 本稿では *pars subjectiva* を渋谷克美訳に倣って「下属的部分」と翻訳しているが、この考察から「主語的部分」と翻訳することも内容に適っているとと言えるだろう。

<sup>30</sup> スコトゥスの個体化論において、個別的存在性 (*entitas individualis*) と個別的差異 (*differentia individualis*) は区別して理解されなければならない。前者は共通本性を存在論的に特定化し、個別者を個別者たらしめる個体化の原理であるが、後者は、スコトゥスが「個別的差異は個別的存在性から取られる」(*Ord. II, d. 3, p. 1, q. 6, n. 187*: "*entitas individualis* a qua sumitur *differentia individualis*") と語り、種差と並列的に語っていることから明らかなおと、種概念を論理的に個別者の概念へと特定化するものである。個別的差異の働きについてのより詳細な説明については本間 [2017] を参照せよ。

<sup>31</sup> この点に関しては本間 [2019] や Wolter [1990b] や Jordan [1984] などを参照せよ。

[凡例]

ドゥンス・スコトゥスの著作は以下から引用する。

Duns Scotus, Johannes. 1950–2013. *Doctor subtilis et Mariani Ioannis Duns Scoti opera omnia*, 21 vols., studio et cura commissionis scotisticae ad fidem codicum edita, praeside P.C. Balić, Roma, (Vat.).

———. 1997–2006 *Opera Philosophica*, 5 vols., Girard J. Etzkorn et al. (eds.), N.Y., The Fransiscan Institute of St. Bonaventure University, (OPh.).

また、引用に際しては以下の略号を用いる。

*Ord.*: *Ordinatio*.

*Quaest. Metaph.*: *Quaestiones super libros Metaphysicorum Aristotelis*.

なお、*Ord.* の翻訳に際しては渋谷克美訳「命題集註解(オルディナティオ)第二巻」、『中世思想原典集成 18 後期スコラ』、1998年、pp. 217–316を参考にした。

[文献表]

Bedtoni, Efreim, 1961. *Duns Scotus: The Basic Principle of His Philosophy*, Bernardine Bonansea (trans. and ed.), The Catholic University of America Press, Washington D.C.

Boulnois, Olivier, 2014. *Lire le Principe d'individuation de Duns Scot*, Vrin, Paris.

Gilson, Étienne, 1952. *Jean Duns Scot: Introduction à ses positions fondamentales*, Vrin, Paris.

Gracia, Jorge J.E., 1994. "Individuality and the Individuating Entity in Scotus's *Ordinatio*: An Ontological Characterization" in *John Duns Scotus, Metaphysics and Ethics*, Ludger Honnefelder, et al. (eds.) Brill, Leiden, pp. 229–49.

King, Peter 1992. "Duns Scotus on the Common Nature and the Individual Differentia", *Philosophical Topics*, vol. 20 (2), pp. 51–76.

Jordan, Michen Joseph, 1984. *Duns Scotus on the Formal Distinction*, Ph.D. diss. Rutgers University.

Noone, Timothy B., 1995. "Individuation in Scotus", *American Catholic Philosophical Quarterly*, Vol. 69 (4), pp. 527–42.

Park, Woosuk, 1988. "The Problem of Individuation for Scotus: A Principle of Indivisibility or a Principle of Distinction?", *Franciscan Studies*, vol. 48, pp. 285–311.

Pickavè, Martin, 2005. "Henry of Ghent on Individuation", *Proceedings of the Society for Medieval Logic and Metaphysics*, Vol. 5, 2005, pp. 38–49.

Shibuya, Katsumi, 2008. "Duns Scotus on 'Ultima Realitas Formae'", in *Giovanni Duns Scotus, Studi e Ricerche nel VII Centenario della sua morte*, Martín Carbajo Núñez (ed.), Antonianum, Rome, Vol. 1, pp. 379–94.

Wolter, Allan B., 1990a. "The Formal Distinction", in *The Philosophical Theology of John Duns Scotus*, Marilyn McCord Adams (ed.), Cornell University Press, N.Y.; rev. and enl., Franciscan Institute Publication, N.Y., 2015, pp. 31–47.

———, 1990b. "Scotus's Individuation Theory", in *The Philosophical Theology of John Duns Scotus*, Marilyn McCord Adams (ed.), Cornell University Press, N.Y.; rev. and enl., Franciscan Institute Publication, N.Y., 2015, pp. 79–113.

———, 1994. "John Duns Scotus", in *Individuation in Scholasticism: The Later Middle Age and the Counter-Reformation, 1150–1650*, Jorge J.E. Gracia (ed.), State University of New York Press, N.Y., pp. 271–98.

石田隆太, 2016. 「《individuatō》と《principium individuationis》の多様性——トマス・アクィナスによる個の思想の一側面」、『哲学』第67号、日本哲学会編、pp. 153–68.

小川 量子, 1986. 「ドゥンス・スコトゥスにおける個体化の原理の完全性について」、『中世思想研究』第28号、中世哲学会編、pp. 129–137.

本間裕之, 2017. 「ドゥンス・スコトゥスにおける個別者認識の可能性」、『論集』第36号、東京大学文学部哲学研究室編、pp. 95–108.

———, 2019. 「ドゥンス・スコトゥスの形相的区別について——意味論的観点から」、『哲学』第70号、日本哲学会編、pp. 250–265

横田蔵人, 2004. 「個体的差異と個体的グラドゥスの間で——ドゥンス・スコトゥスの個体化の原理を巡って」、『中世哲学研究』第23号、京都大学中世哲学研究会編、pp. 87–96.